

『殺人者マルリナ』 折田 侑駿

この映画の主人公・マルリナが敵対するのは「男」であり、タイトル通りマルリナを殺人者たらしめる存在も「男」である。やわらかな陽光に満ちた画面に一番はじめに登場するのは、マルリナではなく強盗団の一人の男である。私たち観客はこの男とともに、初めてマルリナの姿を目にする。それも男の体越しにだ。この男が彼女にとって招かれざる客であることはすぐに分かるだろう。男いわく、すぐに仲間がやってくる。目的は、金——家畜——そして仲間と七人でお前をいただく——というものだ。先述したように、観客は男と同じようにマルリナを発見する。つまり観客の視点はマルリナ側ではなく、その反対からスタートするのだ。あくまで「男」の側からである。

本作にはマルリナともう一人、重要な女性の登場人物がいる。もちろん、マルリナの友人の妊婦のことである。彼女とマルリナが出会う場面では、彼女はマルリナの（あきらかな）異変に動揺を隠せない。しかし話がマタニティーの話題に及べば、まくしたてるように自身の日常を語り出す。内容のほとんどがグチでありながら、その口調には“女であること”への誇らしさがどこか感じられる。ところが男たちはこの女たちに、食事を用意することを強制し、子を産むことを急かし、貞節を破ることを咎め（破っていないにもかかわらず）、そしてその身を（二度も）汚す。

注目すべきなのは、男たちは文字通りの“男の象徴”を振りかざすが、これまた“男の象徴”とも取れる「刀」によって、斬首される。という事実だ。ジョークではないが、男たちは自分の蒔いた種（あるいは蒔こうとした種）によって、自分の首を絞める（斬り落とす）ことになる。なんとも滑稽な話である。

もうひとつ注目すべきなのは、この映画内の天候が終始快晴であることだ。英題が『Marlina the Murderer in Four Acts』であるように、本作は「強盗団」「旅」「自首」「出産」と、四つの章から成っているが、いずれも物語内にある陰惨さとは相反するように、この二人の女性にはあたたかな陽光が降り注ぐのである。これを女性賛歌と捉えるのは間違いだろうか。